

双矢の薬師さん

南部町柏尾

絵：野口宣友



柏尾には「双矢の薬師さま」と呼ばれる薬師如来があられ、この如来さまにまつわる悲しいお話が残されています。

多くの英雄が争った戦国時代、全国でたくさんのお戦いが行われ、戦乱が続いていました。山陰地方を治めていた尼子氏の勢力が衰え、毛利氏が台頭し始め、両家の争いが激しくなると、柏尾の郷も戦火に巻き込まれ、人々は大変苦しんでいました。悲嘆にくれた村人たちは、毎日、薬師如来のお堂を訪れ、必死にお祈りをしていました。

天萬要害と鎌倉で戦いが行われていた時、両軍の武将が互いに矢を番え、まさに射ようとしたりその時、兜をキリリと締め、白馬に乗った武者が打って出てきました。両軍とも白馬の武者が敵か味方か分からなかったため、「あれぞ！敵の大將ぞ！かかれ！」という命令の声を聞いて、両軍は白馬の武者めがけて一斉に矢を射かけました。両脇に2本の矢を受けて、武者は白馬からどっと落ちました。見ればまことにりりしい若武者だっ

たので、両軍の兵は首級を挙げて手柄にしようと、若武者に向かつて我先に競い合って駆け寄りました。すると、どこからか強い風が吹き、両軍の兵が一瞬、足を止めると、風で流された戦いの煙と一緒に、倒れていたはずの若武者も白馬も姿を消しており、その場には、なんと両脇に2本の矢が突き刺さった仏像が一体、悲しそくに横たわって残されていました。

それを聞いた柏尾の郷の村人たちが毎日参拝していたお堂を開けてみると、そこにあつたはずの薬師如来の姿がなく、2本の矢を受けて倒れた菩薩さまの悲しげな姿がありました。

話を聞いた亀嶽山の観正寺の大僧正は、急いで柏尾に駆けつけ、読経を上げました。

薬師如来はわが身をもって村人たちの祈りに応えられ、その後、柏尾の郷は戦火に巻き込まれることもなく、平和な時代が訪れました。村人たちは皆で相談して、郷に祠堂を建立して仏像を安置し、「双矢の薬師」と呼んで、厄難解

除の薬師として信仰しました。



近年まで、その時刺さったといわれる「二筋の矢」が飾られていましたが、損傷がひどかったため、祠堂が改築された時、玄関の欄間に矢の形を2本彫って、由来が語り継がれるようにはからわれました。これによって、「双矢の薬師」のお話は今に伝わり、毎年秋の例祭には、多くの人が薬師さまに手をあわせています。

おしまい

※別名で「双矢の薬師さま」とも呼ばれています。